

被災者の語りの構成に関する分析 Analyzing Contents of Protocol Data of Disaster Victims

○河本 尋子¹, 重川 希志依¹, 田中 聡¹, 立木 茂雄²
Hiroko KOUMOTO¹, Kishie SHIGEKAWA¹, Satoshi TANAKA¹,
and Shigeo TATSUKI²

¹常葉大学大学院 環境防災研究科

Graduate School of Environment and Disaster Research, Tokoha University

²同志社大学社会学部

Faculty of Social Studies, Doshisha University

The objective of this study was to examine contents of protocol data by disaster victims in the Great East Japan Earthquake. Using interview data of disaster victims who have self-reliantly put their lives back after the tsunami, the content of their stories were clarified. This study analyzed text data of unstructured interviews of the victims. The qualitative data include lessons and implicit knowledge obtained from experiencing disasters. It has been, however, often pointed out that analyzing such data requires skills and that subjective may influence the analyzing processes. The present study was to objectively clarify the contents of the protocol data.

Keywords : protocol data, ethnography, the Great East Japan Earthquake

1. はじめに

(1) 研究の背景

災害エスノグラフィーは、災害を体験した人々の言葉から、彼らの被災経験を「系統的に整理し、災害文化を再構築する(重川¹⁾, pp.7)」ことを目指す。それぞれの体験から、普遍化できる教訓・知恵や事実を抽出しながら、その現場を体験していない人々への「追体験、共有化できるようなかたちに個々の体験を組み立てて翻訳していくこと(重川¹⁾, pp.7)」を目的としている。

災害エスノグラフィー調査における震災経験に関する語りは、被災者が災害を経験することによって得た暗黙知や教訓を含む質的データである。それゆえ、エスノグラファーの資質や能力によって、データ収集・分析等に差が生じることが指摘されてきた(田中他²⁾)。したがって、語りの内容解釈にあたって、個人差が生じる可能性があるといえる。

(2) 研究の目的

本研究では、東日本大震災を事例に、宮城県名取市の自立再建をおこなった被災者らを対象とした。彼らによる被災経験に関する語りが、どのような内容から構成されていたかを明らかにすることを目的とした。本研究では語りの内容詳細ではなく、趣旨を捉えるよう意識し、それらをタイトルに表現して比較分析をおこなった。これにより、語りの内容解釈への個人差の影響を把握し、客観的な視点から、自立再建した被災者による語りの内容構成の解明を試行したものである。

2. 研究の手続き

(1) 手続き 1: 調査

本手続きでは、宮城県名取市在住の自立的な生活再建をおこなった被災者(2世帯)を対象とした、非構造化面接法を用いた災害エスノグラフィー調査を各世帯で個

別に実施した。調査詳細は、表1に示すとおりである。なお、調査対象世帯A・Bともに、世帯主および配偶者に対して、同時に面接が実施された。

(2) 手続き 2: タイトル付け作業

本手続きでは、上記2つの調査の音声を書き起こしたテキストデータを用いた。調査に同席しなかった作業員2名がテキストデータを読み、被災者の語りの内容に着目して段落に分け、タイトル付けする作業を実施した。

各作業員は個別に作業をおこなうこととした。主な教示は、時系列的な流れを意識すること、避難先の遷移に着目すること、大まかな内容を捉えることなどであった。

表1 調査日時・場所

調査対象世帯	調査場所	調査日時
A	Aの自宅	2013年2月16日(土) 13時30分~15時00分
B	Bの自宅	2013年2月17日(日) 10時00分~12時00分

3. 結果・考察

先述の2つの調査について、テキストデータでの内容分け作業をおこなった2者間の比較を示す(表2)。各作業員が語りの内容が変化する箇所に着目し、それぞれにタイトル付けを行った結果である。

まず、調査対象世帯Aの語りについては、語りの内容が作業員2名の間で類似していたことが分かる。タイトル付けが多少異なるが、同一の内容を示すものと解釈することが可能な範囲だと考えられる。また、段落分けされた位置もほぼ一致していた。

表 2 語りの内容タイトルの比較

調査対象世帯 A： 語りの内容タイトル			
作業員 1		作業員 2	
A-1-1	2011年3月11日のこと	A-2-1	震災当日の家族それぞれの状況
A-1-2	家族の再会まで	A-2-2	体育館での家族再会まで
A-1-3	避難所での生活	A-2-3	避難所生活に夫が合流
A-1-4	アパートへの引っ越し	A-2-4	家族そろって自力で探したアパートに入居
A-1-5	アパートがみなし仮設となる	A-2-5	手続きと契約までの経緯
A-1-6	住宅探しと住宅購入	A-2-6	住宅探しと購入
A-1-7	行政の対応と情報の収集	A-2-7	情報のとり方、まわりとのコミュニケーション
A-1-8	閑上とのつながり・復興	A-2-8	閑上に戻るのこわい
A-1-9	まわりの支援と自立	A-2-9	親族の動きと自分たちの生活
調査対象世帯 B： 語りの内容タイトル			
作業員 1		作業員 2	
B-1-1	2011年3月11日から家族との再会まで	B-2-1	震災当日から家族・親族との再会まで
B-1-2	姉の家に避難	B-2-2	姉夫婦の家に避難
B-1-3	姉の経営するアパートに引っ越し	B-2-3	姉経営のアパートに入居
-	(B-1-3に含む)	B-2-4	閑上を見に行く
B-1-4	アパートがみなし仮設となる	B-2-5	アパートの契約をめぐる情報錯綜
B-1-5	住宅探しと住宅購入	B-2-6	住宅購入
B-1-6	家族それぞれの思い	-	(B-2-11に含む)
B-1-7	各種の支援策、行政の対応	B-2-7	さまざまな支援
B-1-8	閑上とのつながり・復興	B-2-8	閑上の復興について
B-1-9	仮設住宅に住んでいる仲間との関係	B-2-9	仮設にいる仲間から聞いた状況
B-1-10	現在住んでいる地域とのつながり	B-2-10	新居での生活と近所づきあい
B-1-11	自立	-	(B-2-4に含む)
B-1-12	震災を経験しての思い	B-2-11	被災経験と家族のこれから

次に、調査対象世帯 B の語りの分析結果を考察する。各作業員の結果のタイトル部分に着目して比較すると、一方には存在するが他方にはないタイトルが一部みられる。たとえば、作業員 1 の「B-1-6 家族それぞれの思いや「B-1-11 自立」、作業員 2 の「B-2-4 閑上を見に行く」である。作業員が時系列的な流れを意識してテキストデータの配置を移動し、その解釈結果が 2 者間で必ずしも一致していなかったことを示していると考えられる。調査では、対象者による語りが必ずしも時系列的ではない。特に、調査者側からの問いかけに応じた語りでは、さまざまな時点の内容を含む場合がある。また、タイトル付けに語られている内容の分量が影響していることも考えられる。これらの理由から解釈に差異が生じ、異なるタイトル付けが行われたと考える。

なお、本分析結果のタイトル付けでは、被災者による発言と同様に、調査者による問いかけが影響していた。これは、問いかけに応じる形式で語りが進められるためである。したがって、エスノグラフィーデータの分析にあたって、その目的に応じて、被災者による語りのみを抽出するのではなく、適宜調査者による発言を含めて考慮することが重要だと考える。

4. おわりに

本研究は、自立再建をおこなった被災者による震災経験の語りの内容を客観的に明らかにする取り組みであった。本結果・考察から、内容解釈に多少の個人差がみとめられたが、作業員 2 者間で類似する解釈がなされた部分も確認された。今後は、内容タイトルの比較のみでな

く、文章あるいは段落レベルの類似度の算出等の分析の可能性を検討したい。また、各段落や意味のまとまりから内容詳細の分析に取り組み、自立再建した被災者の語りの特徴を捉えたいと考える。

その他、災害エスノグラフィー調査においては、調査者側の発言や問いかけは対象者の語りに影響を与える。研究目的に応じて、調査者側の発言内容を含めた分析の可能性を視野に入れることが重要だと考える。

謝辞

本研究は、戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）コミュニティがつなぐ安全・安心な都市・地域の創造研究開発領域平成 26 年度研究開発プロジェクト「借り上げ仮設住宅被災者の生活再建支援方策の体系化（研究代表者：立木茂雄 同志社大学）」、2013 年度一般財団法人住総研研究助成「借り上げ仮設住宅施策を事例とした被災者の住宅再建に関する研究（研究代表者：重川希志依 富士常葉大学）」によるものです。本研究にあたってご協力いただいた皆様に深く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 重川希志依：災害エスノグラフィー、予防時報 223 号、日本損害保険協会、pp.6-7、2005.
- 2) 田中聡・林春男・重川希志依・浦田康幸・亀田弘行：災害エスノグラフィーの標準化手法の開発—インタビュー・ケースの編集・コード化・災害過程の同定—、地域安全学会論文集、No.2、pp.267-276、2000.